

◎ 美術館情報

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、多くの美術館等で、臨時休館やイベントの休止、展覧会の中止や開催期間の変更、および入館方法等が変更になっています。

状況が日々変動しているため、各施設の公式ホームページなどで最新の情報をご確認ください。

1. 菊池寛実記念 智美術館【東京・港区】(<https://www.musee-tomo.or.jp/exhibition/>)

4月22日(土)～8月20日(日)

企画展：河本五郎－反骨の陶芸

河本五郎(1919～1986)は 1000 年余り続く陶磁器生産地である愛知県瀬戸市を拠点に、既存の技術や価値観を客観的に捉える論理的な思考で、陶磁器の伝統や歴史に対峙しました。その制作は大きくは前半の陶器と後半の磁器に分かれ、陶器の制作では土の粗い表情や、裂け目、歪み、ひずみを活かして計算し、土の素材感や物質感をダイレクトに造形化する制作を確立しました。そして磁器に移行すると瀬戸の染付と中国陶磁への考察をもとに、現代に必然のある制作を求め、独自の染付や色絵に取り組んだのです。本展は、東京で開催する没後初めての回顧展となります。陶磁器を表現素材と捉え、その創作に真摯に向き合った初期から晩年までの 70 余点で河本五郎の陶芸を紹介します。

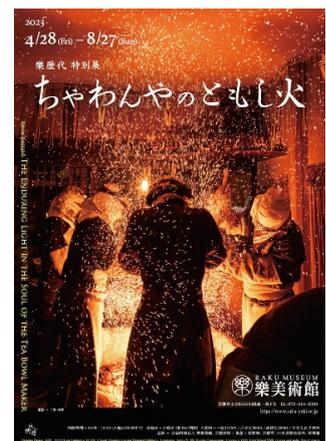


2. 楽美術館【京都・上交区】(<https://www.raku-yaki.or.jp/museum/exhibition/index.ht>)

4月28日(土)～8月27日(日)

楽歴代 特別展：ちゃわんやのどもし火

利休の創意のもと、『侘び茶』に叶う新たな茶碗を生み出した楽家初代・長次郎。唐物、高麗の茶碗が名品とされていた中、和物茶碗としても新たな挑戦であった。『侘び茶』の思考を軸とし、茶の為に生み出された楽茶碗。生まれたばかりの茶碗は、まだ楽茶碗という名もなく、『今焼茶碗』や『聚楽焼茶碗』などと呼ばれていた。轆轤が主流の時代の中、あえて手と篋のみで成形する『手捏ね』という手法で造られ、燃え盛る炎の中から熱いまま一碗のみ窯から引き出される特殊な焼き方で茶碗が誕生していく。長次郎から始まった『楽焼』は、楽歴代へと繋がり、当代それぞれが長次郎茶碗を精神的な軸とし、各々の新たな茶碗を生み出していく。そして始まりから約四百五十年、“ちゃわんやのどもし火”は、令和の時代へと受け紡がれる。本展では、長次郎から脈々と紡がれる楽歴代の茶碗や実際の窯の炎の映像などから楽焼がもつ精神性を探っていただければ幸いです。



3. 出光美術館【東京・千代田区】(<http://idemitsu-museum.or.jp/exhibition/schedule/>)

6月10日(土)～7月23日(日)

企画展：尾形乾山誕生 360 年 琳派のやきもの一響きあう陶画の美

江戸時代中期を代表する京の陶工・尾形乾山(1663～1743)。彼の興した乾山焼は、絵画的な意匠でうつわを飾る「琳派のやきもの」として日本の陶磁史に革命をもたらしました。雅やかな公家文化や文学意匠を取り入れたやきものは、絵画や書的美と融和する新たなやきもの世界を生み出したのです。本展では、野々村仁清や仁阿弥道人など乾山と繋がりをもつ京焼のほか、やきものと呼応する絵画や蒔絵など琳派作品を紹介します。

